
東方重人録

モリノ リン

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方重人録

【Nコード】

N1822P

【作者名】

モリノ リン

【あらすじ】

どこにでもいる普通の女の子。ある夜地震に見舞われてしまう、気がつくとそのは異世界だった。

第1話 プロローグ（前書き）

初小説、初投稿、初サイト使用。ミスも多々ありますがどうぞ生暖かい目線で見守ってやってください。

注意

本作は東方projectの二次創作です。

基本的にオリジナルのキャラクターは強いです。

オリジナル解釈、設定が多々あります。

wiki等にある東方の歴史を参考にしながら進めていきますが、筆者の暴走により色々矛盾点などが出てくるかもしれませんが、それはすべて気のせいです。

本作品は他の幻想入りやSSの影響を大いに受けております。

以上のことをご了承いただける方のみお読みください。

ご意見ご感想はいつでも受け付けております。遠慮せずにドシドシ送ってください。

第1話 プロローグ

守野 皐月

中学1年生 女子

好きなもの：小説 三食団子 日本茶

嫌いなもの：特になし

趣味 読書

そんな少女がある夜、Tシャツの上に甚平姿で、三食団子を片手に、日本茶をすすり、携帯小説に没頭している。

自室の椅子は座り心地が悪く、何度も座りを直す

少女の思考はただ一つ『こんな冒険をしてみたい』

現実の小説よりも奇なり。そんな言葉があるけど、小説のような冒険が現実で出来るだろうか？いや出来ないだろう。

「……ふう」

少女が満足げな溜息を付き、携帯を充電器に差し込む。

「今回の面白かったなあ」

頭の中で先ほど読んだ物語をリフレインさせる。

幸せである。物語に囲まれてその世界に没頭することが。

ニヤニヤしながら最後の三食団子に手を伸ばし掴み取る。
その時である。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

突然大地が暴れだす。地震だ。それも相当大きい。
私は椅子から投げ出される。

「痛あ、な……何？」

取りあえず投げ出されたまま床に伏せる。目をかたく閉じる、地震が収まるように祈りながらジッと耐えた。どれくらい続いただろうか。ようやく地震が収まってくる。

「お……収ま」

そう言いながら閉じていた目を開ける、その目に飛び込んできたあまりの光景に、私は言葉を失わずにはいられなかった。私は自室にいたはずだ、それで地震で数十秒目を閉じていただけ、それなのに。

周囲は見慣れた自室から、見慣れない森へとその姿を変えていた。

第1話 プロローグ（後書き）

どうでしたでしょうか？プロローグはできるだけ簡潔にコンパクトにまとめたつもりです。さてさて、これからこの主人公はどうなってしまうのでしょうか？

第2話

はてさて、どうしたものだろうか。

自室にいた、地震が起きた、目を開けた、森にいた 今ここ。

どう考えても現実的ではない。そう、まるでそれは物語のような。

可能性としては、あの地震で何かが倒れてきたとかで私は意識を失って夢を見ていること。

そっか！夢か！頬を抓る。痛い。

「さて、どうしようかな」

現実逃避もほどにしよう、本当に夢なら笑い話だが現実なら洒落にならない。

夢から覚めるのを待っていたら餓死しました、なんて目もあてられないからね。

何ごととも前向き。そう、前向きだ。

そうだ、物語のような冒険をする折角のチャンスなのだ。

この状況を楽しんでしまえばいい。原因も帰り方も分からない。ならば楽しみながらゆっくり探せばいい。

それにしても・・・地震が起こったのは夜のはずなのに、あたりは明るい。

まあ確かに森なので薄暗いけど、木々の隙間からは光が漏れ出している・・・。

地震の後私が覚えていないだけで気を失っていたのかな・・・。

まあ、考えても仕方ないか。

「取りあえず歩いてみよう」

靴は無く裸足だった、けど、地面には湿ったコケが生えていて裸足でも問題なさそうだ。気持ち悪いし滑るけど……。

それで当面の目標人かなあ。人が集まる場所さえ見つけられれば、食糧や住居は何とでもなるはず。

あ、一応食料はあるよ。地震直後掴み取った3色団子1本。

はあ、と短い溜息を吐いてそれを口にいれながら歩く。

もしかしたら人生最後かもしれない団子の味はいつもより少し味気なかった。

さて、あれから3時間ほど歩いた。

いくつか気になったことがある。

1つ目、この森は広さ、3時間歩いても森を抜けない。人間の歩く速度は時速4キロと本に書いてあった。つまりこの森は簡単計算で12キロ以上ある。しかも山道ではなく平坦な道だ、地理はあまり得意ではないが、そんな森現代日本にあるのだろうか？

2つ目、私の体に何らかの異常が起きているらしい。疲労がないのだ。

お世辞にも私は運動が得意とはいえない。毎年恒例のマラソン大会など競歩で攻略した実力者である。その私が3時間慣れない森を歩き続けて息ひとつ切らさないのは異常だ。

本当に何が起こっているのだろう。

地震が起きる前まで読んでいた小説のシリーズを思い出す。

『幻想入り』

まあ確かにその物語の様に私が幻想入りしてしまったのなら今の状況は納得がいく。抜けない森きつと魔法の森だ。迷いの竹林の様な効果があるのか不明だけど、魔法と銘打ってあるのだから何かある森なのだろう。

私の無尽蔵体力についてもそうだ。『疲れない程度の能力』とかに目覚めているのだとしたら……。

「……そんな訳ないよね」

体の疲れはないけど、心が疲れてきてしまっていた。数時間前よりも意識が内側に入り込んでいる。駄目しっかりしないと。ここは森だ、獣みたいなのがいるかもしれない。熊とかはいないかもしれないけど、イノシシみたいな動物でも私みたいな女子中学生一人で立ち向かえる相手じゃない……ってニユースでやってたもん。

「……でも」

そう呟いて一旦立ち止まる。

「そろそろ暗くなってきちゃった」

木々の隙間からこぼれていた光は徐々に赤色に変色している。

これが日常なら綺麗と思えたのかもしれないけど、今はそれが危険を知らせるサインのように思えた。

どこか安全そうなところを探さなくっちゃ。焦りがこみ上げてくる私は走り出した。どうせ疲れないのだ、体力を温存する意味はない。

「……はれ？」

走り出して驚く、流れる景色が早すぎるのだ。

それは、車の窓から見ていた景色。

跳ぶように走る、走るように跳ぶ。

「あ、あはは……はははははは」

驚いたけど、楽しかった。

体が羽のように軽い、何故今まで気が付かなかったのだろうか。

私は嬉々として走って、走って、走って。

どのくらい走っただろう？自分の速さがあまりにも楽しくて時を忘れてしまった。

でも、ふっ……と我に返る。

「本当に……私の体どうなっちゃったんだろう」

冷静になって急に不安がこみ上げてくる。

人間……じゃないのかな。

異常ともいえるスピードは徐々に落ちていき、ついには立ち止まってしまう。

気が付けばその頬は涙に濡れ、喉の奥からは嗚咽がこぼれ出ていた。近くの木にもたれ掛り、そのままズルズルとしゃがみ込む。

不安に思っではいけない。立ち止まっではいけない。辺りはすでに真っ暗だ。

わかつている、わかつているのに涙が止まらなかった。

どこまでも静かなこの森に、長い時間少女の泣き声が響いた。

第2話（後書き）

そつえば、話の長さはどうでしょう？長いですか？短いですか？
？うゝむ加減が難しい。

第3話（前書き）

前回前々回と少し短く感じたので今回は長めに投稿してみました。
どうでしょう？

第3話

『・・・・・・・・ねえ。』

声が聞こえた。

『・・・・・・・・ねえ。』

その声は私を揺さぶる。霧がかつたような頭に喝をいれ、目を開ける。

『・・・・・・・・きがついた？』

目の前には綺麗な銀髪の女の子が覗き込んでいる。

「あなたは誰？」

『わたしは・・・・・・・・あなた。』

「わた・・・・・・・・し？」

『そう、あなた。』

「どういうこと？」

『わからない、突然合体した。』
「が・・・・・・・・合体！？」

うーむ、よくわからないけど合体しちゃったのか。

『あ、私の名前は皐月、』
『守野もりの 皐月さつき』だよ、あなたは？』

女の子はフルフルと首を振りながら答える。

『わたし……名前ない』

「名前ないの？」

コクリ、今度は縦に振る。

「うーん、名前ないと不便だね」

『さつきに考えてほしい』

「私に？」

コクン、女の子が大きく首を縦に振る。そして、でも、と続けた。

『名前は次会うときでいい、今は話を聞いて。さつきはもうすぐ起きる、起きたら太陽の方角に向かって。』

「太陽の方角に向かったらいいんだね？」

コクリ。

それじゃ、またあとで。

「う……ん……」

気が付けば眠っていた。泣き疲れてしまったのだろつ。獣がどうかと言っていたのに……。

木に寄り掛かったままだったから体の節々が軋む。

私、いつからこんな泣き虫になったんだろつ。そんな思考と裏腹に

心は晴れ晴れとしていた。

「散々泣いたらスッキリしたかも」

うん、大丈夫。そもそも人間じゃなかったら何だと言うのだ。むしろこの森でも生きていける力なのだから歓迎しよう。物語のような世界なのだ、物語のような能力くらい備わっても別におかしくないじゃないか。

「そうと決まれば！」

勢いよく立ち上がる。

立ち上がったものの、どこに行こう。

既に自分が走ってきた方角は分らない。

うーん、顎に手を当てて考える、この仕草は昔読んだ小説の影響だ。

「あ」

思い出す、夢であった銀髪の女の子のこと。

「まさか一人でさみしい私の作った妄想じゃないよね」

「……うん、大丈夫。確信はないけど多分大丈夫。妄想じゃないはず。」

それに他には何も手掛かりは無いしね、それじゃ太陽の方角に走ってみますか。

よし、と自分に喝をいれて走り出す。

「あの子の名前、考えないと、約束したし」

周囲の景色が後ろに流れていく。

「うーん、私より背は少し小さいくらいだったかな。小さいと言え
ばこっちに来て少し視線が低い気がする。まあ気のせいでしょう」

大きな木の根や崖を飛び越す。走り幅跳び軽く30メートルくらい
いけそう。

「小さくて銀色、小銀とか？いまいちだなあ」

その後も休むことなく走り続け、休むことなく考えていたが良い名
前は見つからなかった。

太陽が真上に来るころ、やっとのこと奥に光を見つける。森の出口
だ。

私は足にさらに力を込めて大地を蹴る。

「わ~~~~~」

薄暗い森を突き抜けると、そこには大きな湖が広がっていた。

一日ぶりの水である。

「おりゃ~~~~~」

感極まってそのまま飛び込む、着ていた甚平はびしょ濡れだけど気
にしない。

取りあえず、水を飲む。飲む。飲む。

「・・・・・・・・あ」

飲んでから真水であること気が付いた。

「こんなところでお腹壊したら大変なんじゃ・・・・・・・・」

『だいじょうぶだよ。その体丈夫だもん』

不意に頭に声が響く。この声には聞き覚えがあった。

「あなたは夢での・・・・・・・・？」

そう、その声はあの銀髪少女と同じに聞こえた。
私はその姿を探そうと辺りを探す。

『水面を見て。』

言われるまま水面を見て、そのまま目を見開いて固まった。

水面には当然自分の顔が映るはずだ。が、そこには慣れ親しんだ自分の顔ではなく、銀髪の少女が映っているではないか。

私が自分の顔に手をやると、水面に映る少女も顔に手をやる。

「驚いた、『わたしはあなた』それに『合体した』ってこういう意味だったのか」

おぼろげに納得する、意識は私だけど体はあの子の。そういつことかな？

『能力を使つて』

能力？私に何か能力があるのだろうか？

『私の能力『召喚する程度の能力』私の体だから、使えると思う』

召喚する程度の能力………か。

目を閉じる、意識を自分の中に集中する。考えることは能力について。

すると、能力の使い方とも言つのだろうか。情報が浮かんでくる。

「大丈夫、使えるみたい」

『よかった、それじゃ私を召喚してみて。私はあなたの中にいるから』

情報を辿りながら集中する。

まずは形の形成。銀髪の女の子をイメージする。

次に魂だ。それは自分の中にあるらしいので探す。私と半ば融合している魂を見つけた、多分これだ。

それをコピーして形成した形に入れる。あくまでコピーなのでコピー

先の人物には何も影響はでないみたいだ。『複製する程度の能力』の方が正しいのかもしれない。

よし、これで多分大丈夫なはず。

閉じていた目をそつと開く。失敗していたらどうしよう。

「大丈夫、成功だよ」

目の前には銀髪の少女が微笑みながら立っていた。水面に映った私そのままの顔、違いがあるとすれば衣服くらいだろうか、少女の衣

服は藍色のボロけた浴衣のような衣服を着ている。
思わず私は少女に抱き着いた。

「人だ………人にやっと会えた」

嬉しかった。一人ではないと知ったから。いくら物語の世界だと思っ
ていても人がいないと寂しいものだ、実際に人を目の当たりにす
ると、つい涙腺が緩んでしまう。

私は少女に抱き着きながらしばらく泣いてしまった。そんな私を少
女は優しく抱きしめてくれた。

「突然泣き出してごめんね。取り合えず水から上がろうか………
・・愛衣^{めい}」

私は羞恥から顔を赤く染めながら言う。愛衣は驚いた顔をしていた。

「めい………私の名前？」

私は黙って頷く。愛衣を召喚するとき、私の魂と融合^{さつき}しかけていた。
すでに私は愛衣であり、愛衣は私^{めい}なのだ。だから五月と五月で同じ
五月、ぴったりじゃないだろうか？ちなみに漢字は可愛いから愛衣
です。

「気に入った？」

愛衣は何度もコクコクと頷く。よかった、気に入ってくれたみたい。

「それじゃ水から上がろう」

私は愛衣の手を取り岸へと上がった。

「ねえ、さつき」

お互い岸で大の字になっていると、急に愛衣が話かけてきた。

「どうしたの？」

「まだ、わたし自分のこと、さつきに知ってもらってないと思って」

確かに私は芽衣のことを何も知らない。

「うん、芽衣のこと教えて」

「わたし、狼の妖怪なんだ」

「よ……妖怪!？」

「うん、妖怪」

「へ……へえ、そうなんだ」

妖怪、妖怪ねえ。もうこの世界は何でも有りだなあ。

「それでね、わたしこう見えても3歳なんだよ」

「へ？3歳？見た目10歳前後に見えるけど」

「それはね、わたしとさつきが合体したから、さつきに引つ張られているんだよ。知識にしてもそう。わたしは言葉なんて知らなかったけど、さつきの知識から言葉を知ったの」

「そうなんだ。そういえば、私が能力の使い方がわかったのも、芽衣の知識が私に流れたからかな」

多分、そうだよ。と芽衣は頷く。

「それにね、さつき一晚寝たら、自分の身体能力あまり気にならなくなつたよね？」

「うん」

「それも、感覚が私に近くなつたからだよ」

成程、てつきり自分の『物語思考（今命名）』かと思つていたけど。確かに愛衣はこの身体能力が普通だもんね、いや、もっと凄かつたのかもしれない。

「それじゃ、愛衣は何故私がこつちの世界に来てしまつたか分かる？」

「ううん、分からない。そもそもさつきが違う世界から来たことも知らなかつた」

申し訳なさそうに首を振りながら答えてくれた。
ああそつか、愛衣のことは良く分かつたけど、私のことは話してに
もんね。なら今度は。

「それじゃ、次は私のことを知ってもらおうかな」

私は自分のことを色々語つた。

元いた世界のこと、物語が大好きで小説をよく読んでいたこと。他
愛もないことを色々話した。

愛衣は私の話を楽しそうに聞いていたけど、急に声のトーンを落として
呟く

「そろそろ時間かな」

「時間？何のこと？」

私はガバツと体を起こして愛衣を見る。愛衣も同じように体を起こしてこちらを見ていた。

「わたしの能力には時間制限があるの、その時間は約1時間」

「1時間……あ、でも時間が来てもすぐに召喚し直「それはできないんだよ」……なんで？」

「わたしの魂は既にさつきには完全に同化している。また私を召喚しようとしたら、さつきが召喚されてしまう。さつきの召喚がギリギリのラインだったんだよ」

「……でも、でもそれなら人格はどうなっているの？魂が同化したのなら私と愛衣を足して2で割ったようになるはずじゃ？」

どうにか愛衣を残すことはできないか、必死に抜け道を探す。

「うん、そうだよ。でもわたしまだ3歳だから……わたし

の人格はあまりさつきの人格には影響ないみたい」
体への影響も同じ、と付け足す。確かに元の愛衣の顔つきは分らないけど、目の前にいる愛衣をよく見ると、何処となく元の自分の面影のようなものが見える。と、いうよりも私を少し美化して銀髪にして背を少し縮めたソレだ。

「そ……んな」

また、涙がこぼれだす。愛衣が消えてしまう、また私は一人になってしまう。

「いやだ……いやだよ、愛衣、私を一人にしないでよ……」

愛衣はさつきの様に私を優しく抱きしめる。

「大丈夫、わたしはさつきの中にいる。いつでも一緒、さつきは一人じゃない」

短い間だったけど、さつきと話せて楽しかったよ。

その言葉を最後に愛衣はその姿を消した。

第3話（後書き）

さて、今回皐月（愛衣）の程度の能力が出てきましたので補足したいと思います。あくまでも愛衣の能力なので、皐月にももしかしたら能力が発現するかもしれませんね。

『召喚する程度の能力』

作中でも語られていますが、これは実際には召喚では無く、複製です。なので、召喚された相手には何も影響は出ません。また、生物以外は召喚できません（食糧とか衣類とか）始めは物質も召喚できる設定だったのですが、現代兵器とか召喚されると物語が崩壊する恐れが……というわけで生物のみです。

さて、それでも便利なこの能力、当然制限もあります。

まず、召喚相手の力です。

何も考えずに召喚してしまうと、姿と記憶だけの力の持たない人間のような者が召喚されてしまいます。例えば皐月が召喚した愛衣は当然程度の能力を使えませんし、驚異的な身体能力もありません。

コレを『無能力召喚』といいます。

では、どうしたら力を持たせることができるのか？簡単です、力を注ぎ込めばいいのです。後に出てきますが妖力や霊力といった力を召喚する相手と同等に注ぎ込めば、相手とほぼ同じ相手が召喚できるといふ訳です。応用としては中途半端な力を込めれば中途半端な召喚ができます。

しかし、それにもまた制限があります。

遥かに格下の相手なら問題ありませんが、少しでも力の強い相手を召喚する際には、相手が皐月に心を開いている必要があります。それは、能力が相手の力で抵抗 レジスト されてしまうためです。相手の力によつては、無能力召喚さえ出来ないでしょう。

この能力は死んだ者や存在しない者を召喚することはできません。

コピーする対象がなくては召喚もできないためです。

つまり、この能力は自分より力が弱くて、尚且つ仲が良い相手にしか効力を発揮できない訳ですね。ちなみに今は1体ずつしか召喚できませんが、のちのち増えていくでしょう。

どうでしたでしょうか？自分の妄想を文に書き出すのがとても難しいものです。もしかしたらご理解いただけないかもしれませんが。その時は、作中で皐月がしないことは出来ないし、やっていることは出来る。と、漠然に考えてもらっても支障はないかと思われます。今後ともこの後書きは補足の場として使われることが多々あると思います。

ではでは長々しい文を読んでいただきありがとうございます。今回はこの辺で〆させていただきます。

第4話

さて、早々と時と流れ10年の月日が経った。

「ふあゝあ、そろそろ行こうかな」

湖の近くで見つけた木の洞から抜け出す。

「よっ……はっ……ふっ」

器用に木から木へと跳び移りながら森を駆け抜ける。異常だった身体能力にも慣れた、今ではこれが普通だ。

「もうそろそろ、見えるはず」

愛衣のことは今でも覚えている。もう悲しくない。当然だ、いつも一緒にいるのだから。

「おおゝあんまり変わらないなあゝ」

3年前、人の住む村を見つけた。生活は縄文時代くらいだと思う。歴史の授業ちゃんと受けておけばよかったなあ……。それで嬉々として挨拶しに行ったら「妖怪だ！妖怪が出たぞ！」とか言っただけで、攻撃されてしまった。私は妖怪だったんだ……。と、ショックを受けたのを覚えている。まあ疲労がなかったり、ご飯や水分取らなくても生きていけるみたいだし、逆に何でも妖怪であることに気が付かなかったのか疑問だ。

発見は村だけではない、自分の“力”についてもわかってきた。

妖怪である自分を意識すると出てくる妖力。人間である自分を意識すると出てくる霊力。まあネーミングは自分で適当にしたのだけど、あながち間違ってはいまい。

妖力を持った人間、霊力を持った妖怪を見たことがないから、妖力は妖怪、霊力は人間しか持たないみたい。まあ私は人と妖怪が融合しているから特別ななんだろうなあ……。種族：人妖と言ったところかな。

この10年で他の妖怪にも会った。でも、知能があるとはとても言えないような昆虫をそのまま大きくしたようなのばかりだったなあ……。人語話せないし。そんなグロテスクな妖怪はところ構わず襲ってくるのがしばしばある。取りあえず妖力と霊力で自身を強化して返り討ちに行っている。初めは抵抗があっただけで今では慣れたものだ。

さて、そんな10年を過ごして今は村に来ています。

妖力さえ隠せば妖怪ってバレないんじゃないかな？と最近思い立った。隠し方はこの10年間自分の妖力、霊力を抑えたりして『チドの霊圧が消えた……。！』とかやっていたら身に付きました。本当、何が役に立つかわからないね。

うードキドキする。まだ私のこと覚えているかな？3年たってるし大丈夫、きつともう忘れてるはず。

「こ、こんにちは」

村の入り口で槍を持っている門番（？）のような人に話しかける。門番っぽいからモンさんと名づけよう。

「ん、君は？」

「はい、私は他の村から旅をしてきた者なのですが」

この時代で旅している人なんているのかな。集落に引きこもっているイメージがあるけど……。

「そうかそうか、それは疲れただろう。ささ、中へ入るがいい」

ホッ、何とか大丈夫みたい。様子を見るに旅人は稀にいるみたいだね。

「あの、この村で一番偉い人はどこでしょうか？できればご挨拶しておきたいのですが」

「それなら誰かに案内させよう、おおーい誰か、この娘を村長のところへ案内してやってくれないか！」

すると、近くにいた幼い黒髪の少女がオズオズと近づいて来る。10歳くらいかな？可愛い。

「あの、わたしが案内します」

「シアか、よし頼んだぞ」

私はモンさんに背中を押されているシアと呼ばれた女の子によろしくと会釈する。

「あ、はい、よろしくお願いします。シアといいます」

シアちゃんは礼儀正しく頭を下げてきた、それに合わせて左右に結わっている髪も動く。ツーサイドアップだっけ？後ろの髪を残してツインテールを作る髪型。そんな髪型この時代に……いや気にしないようにしよう。

「おお、私はまだ名乗ってなかったね。私は皐月だよ、シアちゃん」
一通り挨拶を終えると私とシアちゃんはモンさんに一礼して、村の奥へと進んでいった。

そういえば、なんで言葉通じているんだろう？妖怪クオリティ？

シアちゃんに先導され村を歩く、村の人を何人か見かけたがこちらをジロジロ見るだけで話しかけてはこなかった。まあ仕方ない。閉鎖的な村で見たことのない人物。よそ者だからね、それに私銀髪だし。目立ってしまうのは仕方ないか。

気が付けば村で一番大きい家（家と言ってもワラっぱいものを使った簡易テントのようなもの）の前についていた。

「村長さん、ここにいます」

そう告げるとシアちゃんはその家へと入っていく、私もそれに続いた。

村長の家はそれなりに豪華だった、獣の皮があつたし……他には良く分からない物が色々あつた。

「ようこそ我が村へ、ワシはこの村の村長じゃ」

見た目的には私のおじいちゃんくらいの年齢、顎には長い髭を生やし、その髭を右手でわしゃわしゃしている老人が、RPGに出てくる村長のようなことを言った……まあ村長なだけだよ。

「私は皐月といいます」

「何もない村じゃが、ゆっくりしていくといい。今日はどこか泊ま

る予定の場所がありますかな？」

私は首を横に振る。

「ふむ、それならばワシの家でも良いのじゃが……」

村長がそう言うと、シアちゃんが村長の前まで駆けていった。

「私の家に泊まってもらいたいです、お話色々聞きたいので……」

「ほおシアの家か、サツキさんはそれで構いませぬか」

「ええ、泊めていただけるだけで十分です。よろしくね、シアちゃん」

シアちゃんは嬉しそうに微笑むと大きく頷いて返す。その後ろで村長がうんうんと孫の成長を見守るおじいちゃんのような視線を私たちに向けていた。

「ところで随分と若いようだが、途中妖怪には襲われなかったのか？」

おじいちゃんモードの村長が突然キリつとした表情で私に問いかける。予想通りの質問である。当然その辺の返答も考え済みだ。

「生まれつき私には能力がありましたから、妖怪に襲われても退治できたのです」

村長は驚きの表情をみせると、興奮したように声を荒立てる。

「能力、妖怪をも退ける力。それはどのような？」

「『召喚する程度の能力』というものです」

私は自分の能力について簡単に説明する。

「ふうむ、何やら難解な能力じゃな」

確かに、口頭の説明だけではピンとこないだろう。

「では、実際に使ってみせましょう」

えーと、誰召喚しよう。キヨロキヨロと家の中を回し見る。

やっぱり村長さんが知っている人物がいいよね。あ、シアちゃんがいるじゃないか。シアちゃんにしよう。

決めるや否やすぐさま目を閉じて集中する。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

目を開くとそこにはシアが2人並んでいた。片方は驚いた表情を、片方は微笑を浮かべている。驚いている方が本物だ。

「こ・・・・・・・・これは!」

「これが私の能力です、思い浮かべた相手の姿形が同じ物を召喚できます相手が妖怪ならば、相手と同じ量の力を込めた妖怪を召喚してぶつけてやれば同士討ちに出来ます」

妖怪を召喚するときには込める力は妖気なのだけど、妖気を使えることがバれてしまうと折角妖力を消している意味がないので“力”と濁す。

まあ実際に戦う時は召喚するよりも、私が直接殴ったほうが早いのだけど。ムシング!ムシキグ!などと言って遊んだことが無い

かと聞かれたら・・・ノーコメントで。

「なるほど、これならば妖怪に襲われても対抗出来る訳ですな」

私は黙って頷く。

「それに加えて微力ながらも私には靈力が使えます」

「靈力とは？」

これも、実際に見せた（感じさせた？）方が早いだろう。

少しかだけ靈力を解放する。全開で解放しても良いのだけれど何となく余裕を見せて起きたかった。中二っぽいかな？

「ふむ、何やらあなたから不思議な力を感じますな」

「はい、これを私は靈力と呼んでいます、人間ならば皆さんにも微弱には存在するのですが、私はその力が大きいのです、靈力をうまく使用すれば身体能力の向上などに使えるので、妖怪の攻撃を回避したり逃げる事が出来るのです」

ちなみに妖怪の力は妖気といいます。と付け加える。村長は成程と髭をわしゃわしゃする。

「最後に、気になっておったのですが、その銀色の髪は「地毛です」いや・・・でも「地毛です」・・・そうですか」

危ない、銀髪に関しては言い訳のしようがないからね。現代だったら染めましたとか言えばいいのだけど・・・。

「いやあ、ワシの不躓な質問に対しての回答、ありがとうございませう」

いえいえ。と私は村長に返す。

「では、私は少し疲れてしまったので休ませてもらいます。シアちゃん案内頼んでもいいかな？」

そう言ってシアちゃんの方を見ると、私の召喚したもう一人のシアちゃんと手遊びをしていた、私はほっこりした。村長もほっこりしていた。

第4話（後書き）

スーパー補足タイムです。

1、何故村人はファーストコンタクトで皐月を妖怪だと判断したのか。

確かに皐月の外見は変わっています、しかしそれは決定的ではありません。

ファーストコンタクトの際、皐月は自分の妖力をダダ漏れでした。基本的に妖力は妖怪、人間問わず、恐怖を覚えさせてしてしまう効果がついています。村人は今まで生きてきた経験からその感覚が特に敏感なんでしょう。ちなみに霊力には人間を温かくさせたり安心させる効果があります。（個人差があります）

2、シアの名前について。

適当です。シアという登場人物は始め皐月を村長の家に案内するだけの役割で作りました。が、電車の中とかで妄想してたらどんどん設定が盛り込まれていきました。いつしかモブからメインに昇格したのですが、すでに私の中では『シア』という名前が定着してしまっていたのでそのまま使用しています。シア可愛いよ、シア。

3、言葉について。

縄文時代くらいの人なのに何で現代日本語しゃべってるの？たまにカタカナ英語とか使ってるし、と思われた方。その通りでございます。

始めは年数をかけて皐月に学習させる描写にする予定だったのですが、これから何千年も重ねますし、月人や人型の妖怪など言語違うんじゃない？と思われる存在が多々出てきます。なので小説ならではの『ご都合主義』という形で妥協しました。

今はこのくらいでしょうか？ではでは続きをお楽しみください。句
わせた皐月の程度の能力、何にしようかな・・・・・・・・。

追記：4話を上げさせてもらった時点で携帯で読み直したのですが、
行間がギツチリつまっていると読みにくく感じたので、今まで上げ
た全ての話も含めて適当な場所に行間を開けるようにしました。少
しは読みやすくなったかな？

第5話（前書き）

今回第5話を投稿させていただく前に、読者様のご意見をいただき第1話～第4話を修正加筆させていただきました。詳しくは後書きに記しておきます。

第5話

「…………お恥ずかしいところをお見せしました」

シアちゃんは耳まで真っ赤に染め、俯きながら言う。結局私たちは、1時間ずっと遊んでいるシアシアを眺めてほっこりしていた。召喚が消え、ほっこりしている私たちにシアちゃんが気が付いた。今は私を家まで案内してくれているところである。

「可愛かったから、許す」

そう言って私はシアちゃんに向かってニコツと笑う。

それに対してシアちゃんは『か……可愛い？』などと言いながら、更に顔を赤くした。やばい可愛い、今すぐこの娘を押し倒したい。

「あ、つきましたよサツキさん」

どうやら、ハアハアしているうちについてしまったらしい。

「どうぞ、上がってください」

言われるままにその家へと入る。中はとても片付いていた、と、言うよりも物がなかった。真ん中にたき火を起こす場所であろう石の囲いがあり、後は布団の代わりだろうか、薄い獣の皮がある。家の隅に壺のような物があつた、多分水やら食料が入っているのだと思う。それに何よりも……………

「じゃ両親は？」

中にある物はどう考えても一人分しかない、両親はどうしたのだろうか？

「父と母は、私が小さい頃亡くなりました。何度か村長に家に来いと誘われましたが、それを断ってここに一人で住んでいます。村の人が良くてくれるので食べ物心配ありませんし……」

シアちゃんの顔に影が差しこむ、それを見て私は居た堪れない気持ちになった。

「……ごめん、少し無神経だったね」

いえ、いいんです。とシアちゃんは言ってくれた。

「それで、お布団どうしましょうか？」

シアちゃんが暗い雰囲気吹き飛ばすかのように話題を変える、その気持ちを無駄にしないように私も意識して明るく答えた。

「私は大丈夫だよ、霊力を薄く身に纏えば暖かいから」

そう言つて霊力を薄く身に纏う。10年間森で暮らすために培ったスキルだ、これがなかったら3日もせず凍え死んでいただろう……私の体、以外に丈夫だし大丈夫だったかもしれないけど。シアちゃんは目を丸くして、霊力って便利ですね。と感心していた。

こうして、私とシアちゃんの共同生活が始まったのである。

第5話（後書き）

今回は後書きが長い関係で少し短めです。慣れないことに色々挑戦しているので急展開や、文が可笑しい点が多々あるかもしれません。補足：霊力を身に纏えば暖かいというシーンがありました。あれは自身に薄い霊力の結界を張って、外気を遮断しているだけです。そして後は自分の体温で温まっていくなさね。

余談：霊力を身に纏わなくても皐月は森の中で生きていました。人妖すげえ。

頂いた感想に基づいて、Q & A形式で修正等をご報告させていただきます。Q & A形式の関係上、表現を多少変えさせていただいております。

Q、主人公の情報が少なく感情移入がしにくい。1話プロローグの冒頭で皐月の持っていた携帯はどこにいったの？主人公の目的は？
A、確かに、自分の中でははっきりしている主人公の設定も、文字に起こしていなければ読者様に伝わらないのは通りです。携帯電話については筆者がその存在を忘却の彼方に捨て去っていました。その為プロローグを一新しました。

Q、主人公が幻想入りの原因や帰還方法については何も考えていないのでしょうか？

A、流されて流されて、いつの間にかこの状況が当たり前になっていた。という風に考えていましたが、言われてみると有耶無耶にしてみましたと感じられるので、2話の冒頭に原因も帰還方法も重要視していない描写を加筆しました。

Q、3話 冒頭の会話が地の文と混じって分かりにくいです。

A、読み直してみると、成程と思えたので修正いたしました。

Q、3話 終盤談笑の部分、愛衣の設定を伝えられる場面なのに素っ飛ばすのは勿体ない、というか素っ飛ばしてしまったため愛衣の存在がいまいち分からない。

A、上記にある主人公と同じように、筆者の頭の中にある情報を書ききれていないのが原因です。談笑の部分を大幅加筆いたしました。これで伝わったかな？

Q、3話 中盤湖の部分、合体について主人公の中だけで完結していて読者には意味不明です。

A、実は皐月もおぼろげにしか把握していません、その後も有耶無耶になってしまっていますが、皐月がなぜ幻想入りしたという理由に関わるので有耶無耶にしておきます。それでも無理がある！というご意見がありましたら修正いたします。

Q、3話 中盤湖の部分、魂の融合等に皐月が一切驚いていないのが不思議です。

A、皐月は既にこの世界を『物語の世界』で何でもありだと思っています、それを感じさせる描写を1話2話に加筆しました。

Q、主人公が能力を使っている描写が大変わかりづらいです。

A、ごめんなさい、完全に筆者の力不足です。より良い表現が思いつき次第加筆修正いたします。

Q、幻想入りの理由についてはお考えですか？

A、主人公がいた時間軸で起きた地震が関係している……と考えていたのですが、それでは主人公は何千年も月日を重ねなくては判明しない。と、読者様に言われて気が付きました。今、それをどのように読者に匂わすか検討中です。

Q、時が流れるのが早いです。飛びすぎで付いていきません。

A、この物語は何千年もの時間を重ねます。どうしてもある程度纏まった時間を飛ばさなくて物語が進まなくなってしまう。なのでこの点についてはご了承いただきたく思います。

Q、本文では『愛衣』あとがきでは『芽衣』となっていますがどちらが正解？

A、申し訳ございません完全な誤字でございます。正解は本文の『愛衣』です。あとがきを修正しておきました。

Q、霊力と妖力って具体的に何が違うの？

A、これは独自設定になります。

共通・自己強化が出来る（筋力UPや回復力UP）

妖力・妖怪にしか使えない（皐月を除く）

歳を取れば取るほど増える。年齢〓力
爆発力に優れる。

霊力・人間にしか使えない（皐月を除く）

使えば使うほど増える。

支援に優れる、扱いやすい（自分の守りを固める、結界を張る等）

やはり根本的な違いは人間しか、妖怪しか使えない力というところでしょうか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1822p/>

東方重人録

2010年12月5日01時30分発行